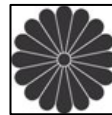


受賞者：田代自治会

(宮崎県えびの市)

天皇杯
受賞年：平成25年



むらづくりの経緯

- ・田代地区は、えびの市の南西部に位置し、地区内で管理する湧水を利用した水稻栽培や畜産業等が盛んな総世帯数124戸の地域。農業生産、生活環境の整備の遅れから、若者の集落からの流出が進み、今後の営農の継続、集落機能の維持に対して不安感が強まっていた。
- ・そこで、S50年頃から自治会が中心となって「営農維持」「資源保全」「情報発信と交流」の3つの目標を掲げて地域活性化の活動を開始。H4年度から基盤整備事業に取り組んだことを契機に、現在に続くむらづくり活動をスタート。

受賞当時

生産活動の特色

- 市内の他地域に先駆けて取り組んだ基盤整備事業により、農業生産基盤及び生活環境基盤の整備を一体的に行い、
- 「農地・水環境保全向上対策」等への取り組みを通じ、非農家も含めた地域ぐるみの資源保全体制を確立。
- これらの取り組みを契機に、農作業受委託組織が設立され、地域農業の担い手として中心的な役割を果たしている。
- さらに後継者の中には、農作業受託会社を立ち上げる者、異業種から農業に参入し自ら販路を開拓する者が現れるなど新たな展開がみられる。

地域づくりの特色

- 若者が結成した「ひまわりロードプロジェクト」による、夏祭りの復活、地域広報誌の発行、「水」に対する感謝の念を形にした水車の建設、世代間交流を目的としたソバ打ち大会、ひまわり油の搾油の取り組み等が、集落の活性化に大きく寄与。各世代間、各組織間のパイプ役として、田代集落を牽引。
- また、集落の成り立ちの起源である湧水池「陣の池」の保全や、伝統行事である「打植祭」の継承等にも取り組んでいる。



田代自治会の皆さん



ひまわり畑での結婚式

現在

評価ポイントの取組状況



○「打植祭」の継承

若い世代に引き継がれており、祭りで使う甘酒を仕込む作業から若者を中心に実施している。



○「陣の池」の保全状況

水の源である陣の池の保全活動を年代問わず継続して行い、水の大切さに対する機運を醸成する機会としている。



○「ひまわりロードプロジェクト」の活動

若い世代がひまわりの植栽を中心にした活動を行っていたが、新型コロナウイルス感染症等の影響で休止している。

今後の展開

- 今後も世代間交流や伝統行事の継承に取り組んでいく。
- こうした取組により集落が若者を中心に連携する機運が醸成されている。令和3年度には、「ひまわりロードプロジェクト」の若者を中心としたドローンを活用した稲作の防除組織が設立され、地区内外で受託を行っている。今後も若者を中心とした地域づくりを進めていく。

受賞者：農事組合法人ファーム大島（富山県射水市）

内閣総理大臣賞
受賞年：平成25年

むらづくりの経緯

- ・大島地区では、都市化による耕作放棄地の発生や農地の減少により、地域農業の継続が危惧されたため、「地域の農業は自分たちで守っていこう」という機運が高まり、将来の農業のあり方について検討を重ね、平成8年度から「一集落一農場」とする3組織へ変換した。
- ・平成15年度に更なる組織体制の検討を進めた結果、3組織を統合した「農事組合法人ファーム大島」を設立する。（4集落・全97戸）
- ・ファーム大島がむらづくりの中心となって、「組合員に大きな負担をかけず、楽しみながら消費者に喜んでもらえる安全で安心な農産物を作り続ける」を理念に地域活動を展開している。

受賞当時

生産活動の特色

○高品質の水稲（「いみず野米」）の安定供給と、大麦・大豆等を生産し、用排水路に沿ったブロック単位で作付けし、土地利用の効率化や排水管理の徹底を図っている。

○えだまめや、チューリップ球根などの園芸作物を導入し、経営の複合化を行っている。

○水田の中心は10a区画であるが、高低差が少ないほ場は畦畔を除去し、40aの区画に拡大し、効率的に作業が行える基盤を整備。

○水稲の湛水直播、乾田V溝直播の実施

○作物ごと、品種ごとに団地化を行う。

○農業機械の運搬や移動距離を少なくし、作業ロスを抑える。

○ひまわり、粳穀などの資源化（バイオマス）の研究や構想の実現に協力するとともに、教育の一貫として学生の手播きや刈取り作業を支援している。

地域づくりの特色

○多面的機能の発揮：用排水路や農道などの維持管理や景観形成、清掃活動を行っている。

○学校の近くのほ場などに、チューリップ、ひまわりを植栽し、地域の景観美化に取り組む。

○ひまわり迷路のクイズラリーや、ひまわりの絵葉書コンテストの展示や表彰も行っており、地域住民や子供たちの農業の楽しみの場を提供。

～受賞直後の効果～

- ・えだまめは、射水市トップの収穫量となる。（協業化・集団化）
- ・水稲は、移植のほかに、乾田V溝直播も取り入れ、省力化を実現（農業機械の整備）
- ・富山県立大学との交流（バイオマス利用等）
- ・労働力の細分化
稲作は64歳まで
園芸は65歳以上
- ・JAいみず野からの働きかけで、「ばれいしょ」の栽培の開始

現在

評価ポイントの取組状況

○主力品目「米」の安定生産
温暖化に対応した高温耐性品種「富富富」の導入。
ドローン防除や乾田V溝直播栽培の拡大による作業効率の向上。
令和2年に乾田V溝直播による富富栽培を県内で初めて実施。
【R5】水稲 28.7ha（乾田V溝直播：コシヒカリ20.2ha、富富富3.5ha、移植：富富富5.0ha）

○複合化と水田フル活用の推進
【R5】大麦 21.9ha、大豆 24.0ha（うち麦あまと21.0ha）
園芸作物（えだまめ4.3ha、キャベツ0.9ha）

○食育活動の継続（楽しむ農業の実践）
【R5】えだまめの栽培体験指導

キャベツの栽培

高温耐性品種「富富富」

圃場管理システム導入

えだまめの播種体験

今後の展開

○圃場管理システム導入による経営管理の効率化

○スマート農機の導入による作業の効率化と後継者の確保

○農福連携による労働力の確保と社会貢献

受賞者：^は波瀬むらづくり協議会（三重県松阪市）

日本農林漁業振興会会長賞
受賞年：平成25年

日本農林
漁業振興
会会長賞

むらづくりの経緯

○松阪市波瀬地区は面積の9割以上を山林が占め、「波瀬材」の産地として有名である。昭和56年に、地域の課題を解決するため「波瀬地域開発推進協議会」を設立し、高性能の機械の導入等林業の近代化、他の産業の発掘等に取り組むこととした。しかし、設立当初の課題に加え、林業従事者の高齢化、過疎化の進行、遊休農地の増加のほか、平成19年度をもって休校となった波瀬小学校の活用など、新たな課題が生じてきた。

○その後、年々増加する課題を解決するため、「自分たちでできることは自分たちでしょう」を合言葉に、同協議会を前身とした「波瀬むらづくり協議会」を平成19年に設立し、活気のある希望の持てる地域づくりを目指すこととした。

受賞当時

生産活動の特色

○移住者が、清流の谷の水を使って品質にこだわったクレソンの栽培を発案、地元住民とともに始め、平成19年以降、近隣のホテルや東京の百貨店などに出荷している。

○平成23年、森林に興味をもつ子どもを養成し、将来の林業後継者の育成につなげるため、体験学習プログラムの冊子「生きるを学ぶ」を作成した。その後、休校となった波瀬小学校を「波瀬ゆり館」と名付け、主に松阪市及び多気郡内の小学生を対象にプログラムを運用した体験学習の拠点として活用し、平成25年8月までに延べ1,069人を受け入れている。

地域づくりの特色

○地域における移住者や地域外の人々との交流を通じた「人の寄るむらづくり」を柱に、活気があり希望の持てる地域づくりを目指して、取り組んでいる。

○平成21年から、関西学院大学人間福祉学部の学生と連携し、体験学習、夏まつり等のイベントに取り組み、限界集落を元気に開かれたまち「元開集落」としていく。

○将来のむらづくりの姿を「地域計画書」としてまとめるため、関西学院大学の学生とともに、住民への聞き取り調査を実施した。今後、住民参加の懇談会等で意見を聴取し、計画の策定に取り組んでいく。

○定住促進に取り組んだ結果、波瀬地区で13組のIターン者が定住している。なお、今後の定住促進に向けて、松阪市が空家バンク制度の創設を検討している。

～受賞直後の効果～
・地道な活動に対する受賞が喜びとなり、ますます「元開集落」にしていこうと、住民一同決意を新たにした。

・岐阜県のほか、北海道、奈良県、福岡県から視察を受け入れた。



休校中の波瀬小学校を活用した活動拠点波瀬ゆり館



郷土料理（でんがら）の料理教室とでんがら



体験学習（川遊び）

現在

評価ポイントの取組状況

○クレソンは高齢化、担い手不足等により作付面積が減少したものの小規模ではあるが生産。

○女性グループが波瀬の郷土料理（クレソンを使用したうどん、でんがら、いも餅、こんにゃく）の料理教室を開催。

○平成27年から栽培を始めたオオイチョウタケは大阪市場や鳥羽市の会員制リゾート施設に提供している。

○体験学習プログラムに基づいた農林漁業の体験学習を、コロナ禍で減少したものの毎年300人程度受け入れている。

○関西学院大学人間福祉学部生との連携は行われていないが、卒業生と住民の個人的交流は継続して行われ関係人口に寄与している。

○松阪市空き家バンク（平成26年設置）を活用し、令和6年1月現在までに20世帯34名が移住。波瀬への移住希望需要は多いものの供給が追いついていない状況。



オオイチョウタケ



体験学習（子供たちのテント設置）

今後の展開

○波瀬の郷土料理が将来に引き継がれるよう料理教室を開催するとともに、引き継ぐ人材を育成する。

○オオイチョウタケの生産量を増やし、ブランド化を目指す。

○コロナ禍のため実施できなかった都市住民との交流イベントを実施し、交流人口を増やし来訪者との交流を深めていく。